

広島市白山第1号古墳出土の短甲について

藤澤昌弘

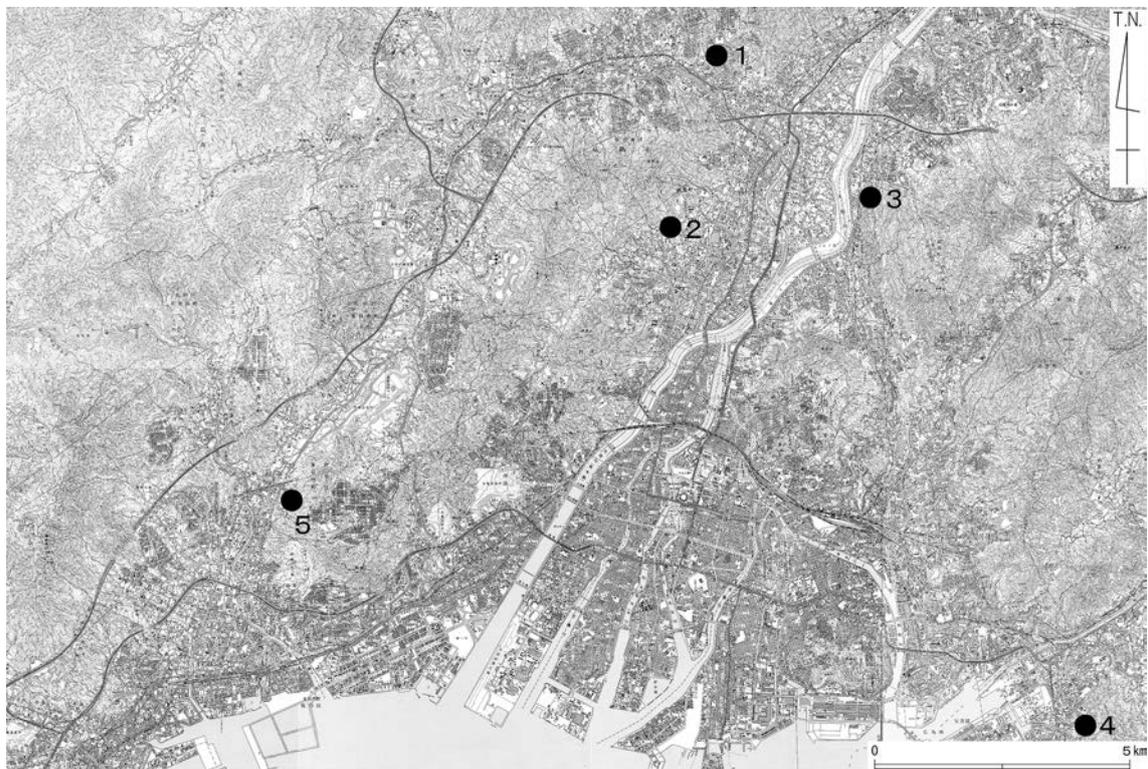
1. はじめに

白山第1号古墳は広島県広島市安佐南区にかつて所在していた古墳であり、墳形等の詳細は不明であるが、これまでに短甲破片の出土が報告されてきた（是光ほか 1973、1頁）。太田川下流域を含む広島湾岸一帯では、都合5基の古墳より短甲の出土が報告されてきたが（山澤編 2011、86～87頁）、出土した短甲そのものに関しては白山第1号古墳も含め断片的な報告にとどまっているものが多く、城ノ下第1号古墳から出土した横矧板鋌留短甲（若島編 1991）を除き、その詳細が不明であった。こうした状況のなか、白山第1号古墳より出土した短甲破片を広島県立歴史民俗資料館にて実見する機会を得た。本稿では実見した破片の一部を図化し、その報告に加え、年代観を中心に若干の考察を行いたい。

2. 出土資料紹介

(1) 白山第1号古墳の概要と出土資料の現状

白山第1号古墳を含む白山古墳群は広島市安佐南区の権現山から南へ延びる丘陵上（現在の毘沙門台周辺）に位置し（第1図）、丘陵南東側に第1号古墳が、南西側に第2号古墳が



第1図 広島湾岸における短甲出土古墳分布図 (S=1/150000)

1. 白山第1号古墳 2. 三王原古墳 3. 中小田第2号古墳 4. 西尾古墳 5. 城ノ下第1号古墳

所在していた（是光ほか 1973、18頁）。1963年作成の記録⁽¹⁾によれば、第1号古墳の墳丘は畑地として削平を受けており、調査時には既に消失していた。出土遺物については付近に所在する祠内⁽²⁾にて短甲の破片とともに鉄刀、鉄槍、鉄斧などが安置されており、1956年に可部高等学校の杉山博氏によって採集され、同校史学部にて保管されていた。短甲破片も含むこれら出土遺物については広島県立歴史民俗資料館にて現在保管中である。

（2）資料紹介

出土短甲の概要 白山第1号古墳より出土した短甲（第2図、第3図）は後述する前胴部分の破片より、横矧板鋌留短甲と推定されるが、多くの部位を欠失しており、段構成をはじめとする構造の詳細な部分については不明である。なお冑や付属具の有無について、これらも副葬された可能性を考慮し、破片を精査したが、該当するような破片は確認できなかった。

構造について 先述のとおり、白山第1号古墳より出土した横矧板鋌留短甲は段構成をはじめとする本来の形状が不明である。そのため以下の破片に関する報告については、ひとまず通有の前胴後胴7段構成の短甲と仮定したうえで紹介する⁽³⁾。

1は右前胴の上側部分で豎上板、上段地板、引合板といった各部材が鋌頭径0.7cm、鋌頭高0.3cmの鋌で連結されている。豎上板は右端部が欠損しているものの、縦幅は引合板に接するところで5.2cm、厚さは0.2cmを測り、上部には幅0.8cmの鉄包覆輪が確認できる。上段地板部分は残存部分の形状から、長方形に裁断された厚さ0.2cmの鉄板と推定されるが、半分以上を欠損しており、縦横ともに本来の寸法は不明である。なお破断面の近辺に直径0.2cmの円柱状を呈した受紐孔が確認できる。引合板は最大幅3.0cmで厚さは0.2cmである。

2は断面形状と鉄包覆輪から左前胴豎上板の上端部分と推測され、厚さは0.2cmを測る。

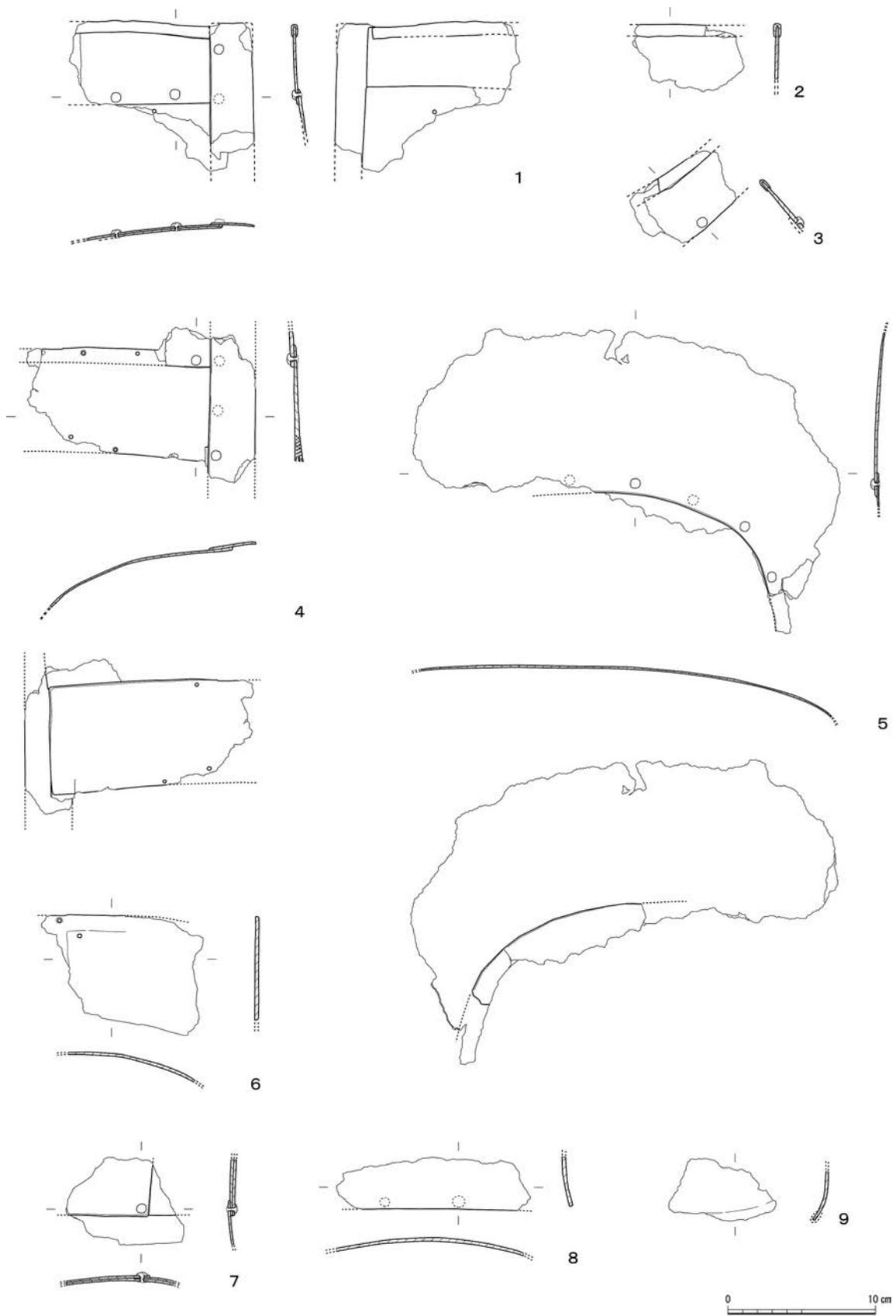
3は後胴押付板のなかでも脇部に近い部分の破片であるが、左右の向きは確実ではない。鉄包覆輪が装着されており、押付板の厚さは0.2～0.3cmである。

4は右前胴の下段帯金、下段地板、引合板の破片であり、下段地板と引合板部分の間に裾板と推定される部材片が僅かに残存する。下段帯金部分は殆ど欠損しているが、破片1と同様の鋌で連結された部分が遺存しており、厚さは0.3cmである。下段地板は正面前胴から脇部分にかけて大きく湾曲しており、下端部分には直径0.2cmのテーパのついた鋌孔とともに、直径0.2cmの円柱状を呈した腰緒孔が確認できる。全長は脇部の欠損により不明であるが、幅は引合板近くで7.5cm、厚さは0.3cmで脇部分へ近づくにつれて徐々に薄くなる。引合板の最大幅は破片1と同じく3.0cmで、厚さも0.2cmを測る。

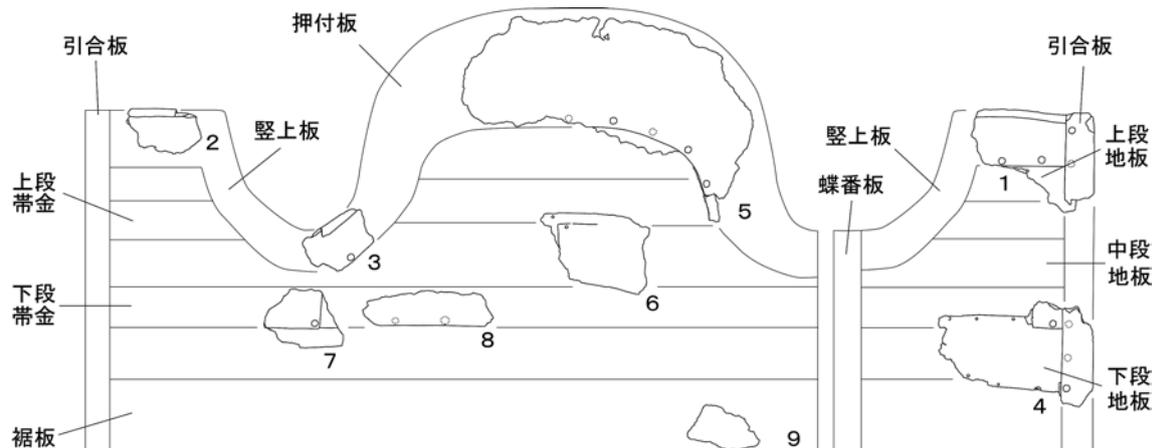
5は後胴押付板と上段地板部分の破片であるが、破損により押付板端部は全て欠損している。押付板の厚さは0.2cmであるが、上端部へ近づくにつれて薄くなる。押付板と上段地板の連結に用いられている鋌は錆が著しいものの、破片1や破片2と同様の鋌と推定される。

6は後胴中段地板の破片であり、厚さは約0.2cmである。直径0.2cmのテーパのついた鋌孔と、円柱状の懸緒孔が確認できる。

7は下段帯金の左脇接合部分と推定され、帯金部分と地板部分が3枚留めで連結されている。鋌は錆が著しいものの、他の破片と同一の鋌と考えられる。



第2图 白山第1号古墳出土短甲 (S=1/4)



第3図 白山第1号古墳出土短甲展開模式図

8は帯金部分の破片であり、やや緩やかに内反する形状から、後胴下段帯金の破片と推定されるが、上端部分を欠失しており本来の幅は不明である。

9は緩やかに外反する形状から脇部分から後胴の裾板部分と考えられ、脱落した鉄包覆輪の痕跡が確認できる。

3. 考察

以上、白山第1号古墳から出土した短甲の破片について紹介した。段構成をはじめとする短甲の一部構造については確定に至らなかったものの、特異な破片は見受けられず、引き続き前胴後胴7段構成の横矧板鉸留短甲としたうえで、時期を検討したい。

白山第1号古墳出土短甲の主要な属性について列挙すると、①地板が横矧板、②接続に用いられた鉸の鉸頭径は約0.7cm、③破片4より引合板の接続形態は3枚留めを採用するB類(滝沢 2015、19～21頁)、④鉄包覆輪、の4点が挙げられる。後胴上段帯金の鉸数や開閉部分の詳細などは不明であるが、これらの特徴は滝沢氏による編年案(滝沢 2015)でのYBⅡ-1式段階(TK208型式段階)に、川畑氏による編年案(川畑 2016、川畑 2018)での8期から9期(5世紀中葉から後葉)に該当するものとして捉えられる。なお広島湾岸における他の短甲との比較であるが、滝沢氏の編年案を参照した場合、中小田第2号古墳出土短甲⁽⁴⁾はSBⅠ式からSBⅡ式の間(TK216～TK208型式段階)に、城ノ下第1号古墳出土短甲についてはYBⅡ-2式からⅢ式段階(TK208型式段階以降)に該当し、本資料の時期は両古墳より出土した短甲の中間に位置づけられる。三王原古墳⁽⁵⁾、西尾古墳⁽⁶⁾より出土した短甲については資料の状態もあり依然検討の余地は残るが、広島湾岸より出土した甲冑の時期について、概ね5世紀の中葉から後葉に収斂する点が指摘できよう。

4. おわりに

白山第1号古墳より出土した短甲は上述の経緯もあり、存在自体は知られていたものの、編年的位置づけをはじめ、その詳細については長らく不明であった。しかしながら本検討に

より、出土した短甲についてはTK208型式に並行する段階の横矧板鋌留短甲であることが明らかとなった。加えて白山第1号古墳出土短甲も含む広島湾岸一帯より出土した甲冑について、それらの時期が概ね5世紀中葉以降に収斂する傾向も指摘した。

なお留意すべき点として、甲冑が副葬品の中でも比較的古相を示す可能性（藤田 2006、29頁）を踏まえた場合、甲冑の時期のみで出土古墳の時期を比定することは適切とはいえない。白山第1号古墳の年代観については、他の共伴遺物も踏まえた検討が別途必須である。

本稿の執筆に際し、広島県歴史民俗資料館の村田晋様には資料の情報提供のみならず、実見及び報告に際して大変お世話になりました。ご多忙にも関わらず、調査に関する事務手続きのほか、写真撮影やその後の報告作業に際して便宜を図って頂きましたこと、大変感謝いたします。また三王原古墳出土資料については立専寺住職の武田公紀様から、西尾古墳出土短甲については矢野公民館様より掲載の許可を賜りました。厚く御礼申し上げます。資料の時期や図面レイアウトについては広島大学考古学研究室の野島永教授、同大学院生の下江裕貴氏、学部生の永野智朗氏にご相談に乗って頂きました。英文については有松唯准教授、シュタインハウス・ウェルナー客員准教授に添削を賜りました。末筆ながら記して深謝いたします。

註

- (1) 白山第1号古墳と出土遺物に関する経緯については広島県立歴史民俗資料館にて保管されている「広島県埋蔵文化財包蔵地調査カード」を参照とした。
- (2) 白山第1号古墳に用いられた石材でつくられたとされている（是光ほか 1973、3頁）。
- (3) 短甲の各部名称については橋本達也氏による名称案（橋本 2012、71頁）に準拠し、左右については着用者からみた向きとしている。
- (4) 中小田第2号古墳出土甲冑については現在広島大学考古学研究室にて保管中であり、筆者実見。
- (5) 三王原古墳より出土した遺物は現在広島市安佐南区の立専寺にて保管中であるが、短甲破片はほぼ3cm未満の細片となっており、部位が特定できる大型破片はいずれも所在不明である。そのため短甲の詳細については明らかではないが、写真図版にて報告された甲冑破片（玉井 1929）の状態、並びに長頸鋌や多角形袋式鉄矛（中田 1973）が共に出土している点を踏まえれば、三王原古墳より出土した短甲も鋌留短甲であった蓋然性が高い。
- (6) 西尾古墳より出土したとされる遺物は広島市安芸区の矢野公民館にて保管中であり、横矧板鋌留短甲の後胴部破片が2点展示されている。これらの破片を実見したところ、各部材の連結には鋌頭径0.9cmの鋌が用いられており、また破片の1点には鉄地金銅張かつ方形4鋌の蝶番金具が確認できる。蝶番金具には赤磐市正崎第2号古墳出土短甲のような装飾は確認できなかったものの、広島県における現状唯一の金銅装を用いた鋌留短甲として注目できる。

引用・参考文献

- 川畑 純 2016 『甲冑編年の再構築に基づくモノの履歴と扱いの研究』平成24～27年度科学研究費（学術研究助成基金助成金（B））研究成果報告書、奈良文化財研究所。
- 川畑 純 2018 「古墳時代甲冑の系統と授受」『史林』第101巻第2号、史学研究会、1～39頁。

- 是光吉基・鹿見啓太郎・篠原芳秀・吉本裕子 1973 『白山城跡発掘調査概報 -北広島ニュータウン造成工事に係る-』広島県教育委員会、1～3頁、18頁。
- 滝沢 誠 2015 『古墳時代の軍事組織と政治構造』同成社。
- 玉井源作 1929 「山本村三王原古墳」『広島県史跡名勝天然記念物調査報告』第1集、広島県、40～42頁。
- 中田 昭 1973 「広島市祇園町三王原古墳について」『芸備』第1集、芸備友の会、1～5頁。
- 橋本達也 2012 「甲冑の部位名称について」『マロ塚古墳出土品を中心にした古墳時代中期武器武具の研究』国立歴史民俗博物館研究報告第173集、国立歴史民俗博物館、69～73頁。
- 藤田和尊 2006 『古墳時代の王権と軍事』学生社。
- 山澤直樹編 2011 『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告16 曲第2～5号古墳』財団法人広島県教育事業団。
- 若島一則編 1991 『広島市佐伯区五日市町所在 城ノ下A地点遺跡発掘調査報告』財団法人広島市歴史科学教育事業団。

Report on Chest Armor Unearthed from Shiroyama Mounded Tomb No.1 in Hiroshima City

Masahiro FUJISAWA

Shiroyama mounded tomb (*kofun*) No.1 is located in Asaminami ward, Hiroshima City. Up to now, several unearthed fragments of chest armor have been reported. While the details and chronological positions of those finds have remained unclear for a long time, an analysis of the fragments, which were kept in the Hiroshima Prefectural History and Folklore Museum, revealed that they belonged to a type of chest armor made of horizontally arranged long metal stripes riveted together (*yokohagiita byōdome tankō*). It became clear that they could be dated around the middle third of 5th century A. D.. Although there is still room for examination, all chest armor unearthed in the Hiroshima Bay area (including the materials from Shiroyama mounded tomb No.1) is basically considered to have been produced since the middle third of the 5th century A. D..

白山第1号古墳出土短甲

図版第1



a. 短甲破片保管状況



b. 短甲破片（前胴部ほか）

白山第1号古墳出土短甲

図版第2



a. 短甲破片（後胴押付板）



b. 三王原古墳出土短甲破片現状